



2016年(平成28年)

9月号(No. 856)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

第1回「山の日」記念全国大会 皇太子殿下ご一家迎え上高地で開催

《山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する》——今年から新たに国民の祝日となった「山の日」記念全国大会が、8月11日、皇太子殿下ご一家をお迎えして長野県松本市の上高地で開かれた。7年余にわたって「山の日」運動を推進してきた成川隆顕会員に記念式典の模様などを報告してもらった。

成川隆顕

初めての祝日「山の日」を迎えた上高地は好天に恵まれた。穂高の山々に囲まれた記念式典の会場(バスターミナルに特設に、登山服姿の400人が集まった。大会実行委員会によって準備は周到に整えられ、午前9時開会。多彩なプログラムが分刻みで進行した。

ステージに上がった(公財)全国山の日協議会の衛藤征士郎評議員(衆院議員、超党派「山の日」議員

連盟会長)、山本公一環境相、阿部守一長野県知事、菅谷昭松本市長、地元上高地の代表らの紹介が終わると、式典行事の開幕を告げる鐘が、山々への想いや願い、感謝を込めて8つの澄んだ音色を響かせた。

国歌の斉唱、祝日「山の日」の誕生を祝う主催者の歓迎の言葉に続いて皇太子殿下が挨拶された。

皇太子殿下は50年前に天皇、皇

目次

第1回「山の日」記念全国大会	
皇太子殿下ご一家迎え上高地で開催	1
立山で開かれた日中韓3国学生交流登山	5
スポーツ・クライミング東京五輪追加種目に正式決定	9
東西南北	10
活動報告	12
山行委員会	
支部だより	13
秋田支部/東九州支部/群馬支部/東海支部/福岡支部	
図書紹介	16
図書受入報告	17
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	18
新入会員	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

后両陛下と上高地を訪れ、雄大な景色に魅了された思い出に触れながら、「山の日」が明るく豊かな

『山の未来』を創造する第一歩となることを願っています」と話された。

左記の全文をお読みになれば分かるが、皇太子殿下のお言葉は、この運動を通じて私たちが掲げてきた理念をそのまま汲み上げられたもので、日本山岳会の会員に、今後ともしっかりと頼みます、と激励を送られているように拝聴した。

ステージには雅子妃殿下が並ばれ、長女の



バスターミナルに設けられた式典会場と穂高連峰

愛子様は舞台近くのコーナーで式典を見守られた。

皇太子殿下の挨拶(全文)

第1回「山の日」記念全国大会記念式典に皆さんとともに出席できることを、大変うれしく思います。「山の日」は、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ことを趣旨に、平成26年に国民の祝日として制定されました。制定に尽力された多くの皆さんに心から敬意を表します。



記念式典で挨拶される皇太子殿下

また、記念すべき第1回の全国大会が、山岳観光地として名高い、ここ長野県松本市上高地で開催されることは、この「山の日」の制定趣旨を表現するにふさわしく、大変意義深いことと思います。

私も昭和42年に両親とともにこの地を訪れ、穂高連峰の雄大な景色に魅了され、そこから流れ出る梓川の清流に心を癒やされたことが、懐かしく思い出されます。

我が国は、国土の約7割を山地が占めており、私たち日本人は、古くから山に畏敬の念を抱き、森林の恵みに感謝し、自然とともに生きてきました。

また、長野県では登山学習というすばらしい取り組みが脈々と受け継がれており、この大会のロゴマークは地元の子どもたちが制作に関わったと聞きました。次代を担う子どもたちに山のすばらしさ

や厳しさ、山の恩恵への感謝の気持ちなどをしっかりと引き継いでいくことが大切であり、「山の日」が明るく豊かな「山の未来」を創造する第一歩となることを願っています。私自身、山に登り始めて50年ほどになりますが、山に登るたびに新しい発見や新たに学ぶことがあり、山の魅力は尽きることがありません。

このように、「山の日」が誕生したことを機に、ここ上高地から山の価値を広く国内外に発信し、多くの人が山に親しみ、その恵みに感謝するとともに、美しく豊かな自然を守り、次の世代に引き継いでいくことを心より願い、挨拶いたします。

安倍総理がメッセージ

安倍晋三総理大臣からのメッセージが読み上げられた。総理は「古来、私たち日本人は、故郷の山への愛着と畏敬の念を抱きながら、山とともに暮らしてきました。『中略』祝日『山の日』は国民の皆さんにとって、山との関わり合いのなかで築いてこられた日々の暮らしや地域の文化・伝統の大切さに思いを致し、山との触れ合いを

さらに深め、その未来とともに語り合う日になるでしょう」と制定の意義を述べ、「政府としても、国内外に日本の山の多様な魅力を発信し、先人から受け継いできた国民全体の財産として、次世代にしっかりと引き継いでいく決意です」と結んだ。行政トップのこの明確な決意表明は、政府の施策につながる約束でもあると、私なりに解釈しながら聞いた。

「山の日」祝日法案が成立して5ヶ月後の2014年10月、超党派の国会議員連盟(衛藤征士郎会長)が政府に対して、要望書(決議文を送ったことを思い出した。内容は、最初の祝日を迎える2016年の8月には「山の日」にふさわしい行事を行なうこと、関係行事を実行するための体制を政府を挙げて整え、施行を万全な体制で迎えること、などである。

今回、第1回の記念式典を主催したのは公益財団法人全国山の日協議会(谷垣禎一会長、磯野剛太理事長)と長野県、松本市といった自治体、地元の上高地町内会などをつくる実行委員会だが、実行委員会の構成員には警察庁、消防庁、文部科学省、スポーツ庁、林野庁、国

土交通省、環境省などの関係諸官庁が名前を連ねている。今後の「山の日」運動を考えると、心強い限りで、官民一体の運動に確かな展望をもたらすものと受け止めた。

山岳団体関係者も列席

自然豊かな会場にふさわしい音楽演奏があった。長野県出身の宇宙飛行士・油井亀美也さん、松本にゆかりの指揮者・小澤征爾さん、作家でナチュラリストのC・Wニコルさんのビデオ・メッセージが映し出された。

議員連盟の衛藤会長が祝日制定までの経過を説明した後、地元小・中学生6人が「未来への誓い」を朗読した。「山は私たちの宝物。きれいな山、自然や文化を守るために、自分たちからできることを始めよう」の誓いが会場に響く。

結びの挨拶を日本山岳会会員で文化功労者、全国山の日協議会の副会長でもある松沢哲郎さんが述べ、1時間半の記念式典は終了した。

式典には「山の日」制定運動に加わった多数の山岳関係者が招待された。当会では歴代の会長、宮下秀樹、尾上昇、森武昭、小林政

志の4氏がそろって出席し、日本山岳協会(八木原罔明会長、尾形好雄副会長)、日本勤労者山岳連盟(西本武志会長、川嶋高志事務局長)、日本山岳ガイド協会(今井通子副会長)、H A T J (神崎忠男会長、田上和義理事長)の代表らとともに席を並べた。当会信濃支部の塚原賢勝支部長も招待された。

出席者には、信濃支部が編集に協力した『ウェストンが残したクライマーズ・ブック』(制作・信濃毎日新聞社)が配られた。

なお、式典では次回の全国大会が栃木県那須町で開催されることが報告され、松本市長から栃木県の代表にバトンタッチの印ともいえる山の帽子が手渡された。

市民芸術館ホールで祝祭式典

山の恵みに感謝する気持ちをさまざまな形で表現し、一般の参加者とともに共感しよう。11日午後、まつもと市民芸術館の大ホールに800人が集まって祝祭式典が開かれた。午前中、上高地の記念式典に出席した人も半数以上が午後の祝祭式典に移動して、「山の日」を祝った。

祝典が始まるとすぐ、信州の山

里の美しい映像が流れた。水や空、森、森林、木材などの「山の恩恵」と、山からの知恵を伝えてきた里山の人々の関わりが紹介された。松本市出身の世界的なバレエダンサー・二山治雄さんと長野市の白鳥バレエ学園によって、「山」をイメージしたという記念舞踊が披露された。

多くの参加者を惹き付けたのは波田少年少女合唱団のハーモニーだった。曲は「山はふるさと」。全国山の日協議会が歌詞を公募した中から最優秀作に選ばれた吉井省一さんの作品に都倉俊一さんが曲を付けた。加藤登紀子さんが歌ってCDが発売されたが、52人の子



「山はふるさと」を披露した波田少年少女合唱団

どもたちによる合唱には、趣の違った味わいがあった。舞台には吉井さんも上がり表彰を受けた。祝典は松本市の坪田明男副市長が鳴らす11の山鐘で締めくくられた。11番目、最後の鐘には、「明るく豊かな山の未来を子どもたちに託す思い」が込められた。

国際フォーラムに各国代表 山岳ツーリズムで意見交換

上高地で記念式典が行なわれる前日の午後、松本市内のあがたの森文化会館で「山の日」制定を記念する国際フォーラムが開かれた。アメリカやイギリス、カナダ、イス、中国、ネパールなどの大使



記念式典の前日に開かれた国際フォーラム

平成 28 年度年次晩餐会のご案内方法等の変更

本年度の晩餐会は下記のとおり開催する予定ですので、お知らせいたします。なお、晩餐会のご案内方法等が例年と異なり、以下のように変更になりますので、お間違えのないよう、よろしく願い申し上げます。

1 ご案内方法等の変更

	昨年まで	本年度
案内状の発送方法	封書で会員全員に郵送していた。	会報「山」の発送方法が帯封から封筒に変わるので、会報「山」10月号の封筒に同封してご案内します。
申込み方法	同封の返信用葉書で出欠を回答していただいた上で、出席の方は、同封の振込用紙で会費を振り込んでいただいた。	返信用葉書は廃止し、出席される方だけ、同封の振込用紙で会費を振り込んでいただきます。
その他	周年記念の晩餐会以外では、非会員の同伴を認めていなかった。	ご家族、介助者の同伴を認めることとします。 その他、詳細は「山」10月号に同封のご案内状をご覧ください。

2 開催予定

- (1) 日時 平成 28 年 12 月 3 日 (土)
- (2) 会場 京王プラザホテル (東京都新宿区西新宿 2-2-1 TEL 03-3344-0111 代表)
- (3) 内容 10 月下旬に会報「山」に同封してご案内状をお送りします。

館関係者を含め 100 人余が出席した。
《お年寄りや子ども、障がい者、外国人、すべての人々に山と親しむ機会を》がこの国際フォーラム開催の趣旨。行政や関係機関の取り組み、課題などで情報を交換し、意見を出し合った。司会は萩原浩司

さん(当会会員)と山が好きで女優の工藤夕貴さん。長野県で環境、地域振興などを担当する中島恵理副知事が出席して意見を述べた。当会の吉川正幸、大久保春美両副会長も熱心に聞き入った。
《写真はすべて第1回「山の日」記念全国大会実行委員会提供》

第4回登山教室指導者養成講習会のお知らせ

日本山岳会の活性化・会員増強の方策として登山教室の運営が注目されているところですが、各支部において次期リーダーを育成し、支部山行や登山教室実施のために必要な知識と技術を学ぶための指導者養成講習会を開催いたします。このたび東北ブロック各支部の協力、とりわけ宮城支部の積極的な参加により宮城県で講習会を開催する運びとなりました。登山教室企画のない支部の会員や、登山経験の浅い会員も参考になる講座内容を用意しております。講師はそれぞれ分野で経験の豊富な方々にお願ひしましたので、最新の登山知識・技術を身に付ける格好の機会かと思ひます。近隣の支部会員のご参加をお待ちしております。

主催…日本山岳会 支部事業委員会
共催…日本山岳会東北ブロック
主管…日本山岳会宮城支部

月日 平成 28 年 10 月 15 日(土)～16 日
(日)
場所 秋保温泉・岩沼屋ホテル

(仙台市太白区秋保町湯元薬師 107 TEL 022-398-2011)

日程・講義内容

10月15日 13時集合 山の医療と救急対策(講師…野口いづみ)／地図読み・道迷い対策(講師…宮崎紘一)／登山の安全管理(講師…松原尚之)／懇親会

10月16日 7時30分集合 実技講習・登山の安全管理と対策(講師…松原尚之)／12時閉講後解散 参加費 1万5000円 宿泊費・食事代(3食)・資料代含む

参加資格 日本山岳会会員で、初心者引率リーダーを目指す者 山岳保険に加入している者 締め切り 9月30日(定員30名。定員になり次第締め切り)

申込み・問合せ 宮城支部・高橋二義まで(〒982-0823

仙台市太白区恵和町3-27

TEL 022-229-7850

FAX 022-229-9186

✉ tugiyo@ams.odn.ne.jp

《注意事項》2日目は実技講習に相応しい服装・装備で参加のこと。登山靴、スリッパ120cm、60cm各1本、カラビナ2個は必携。

(支部事業委員会 宮崎紘一)

REPORT

立山で開かれた日中韓3国学生交流登山

毎年夏に行なわれてきた日中韓3国学生交流登山は、今年で10回目を迎えた。日本が受け入れ国となった今回は、国立登山研修所での登山技術研修と、立山登山を中心とした活動を行なった。

期間 8月13日(土)～19日(金)

参加人数

日本…スタッフ6名、学生8名

中国…スタッフ7名、学生8名

韓国…スタッフ3名、学生10名

活動場所 13日～15日…国立登山

研修所 16日～17日…立山・室

堂周辺 18日～19日…東京

行動記録

8月12日(韓国隊到着)

フライトの都合により韓国隊が1日早く富山空港に到着。日本隊の先発メンバーが出迎えた。富山市内のホテル泊。

8月13日(開会式)

午後、富山空港に中国隊が到着し、日本隊先発メンバーと韓国隊で出迎える。その後、立山駅そばにある国立登山研修所(以下、登山研)へ移動。日本隊の後発メンバーは直接、登山研に集合した。最初

に開会式が行なわれ、宮崎所長並びに3ヶ国の代表者によるスピーチをいただいた。夕食の後、初対面となる学生同士が早く打ち解けられるようにとアイスブレイク・アクティビティが行なわれた。

8月14日～15日(登山技術研修)

2日間にわたり、加藤直之ガイドによるセルフ・レスキュー技術やクライミングの基礎技術の研修を、英語を通じて受けた。講習にあたっては、3ヶ国の学生が均等になるよう、6人程度の4グループに分かれた。さらに、講習では実践練習に重きを置いて、グループ内で意思疎通を図りながら各技術の習得を目指した。このため、技術の習得のみならず、学生同士のより積極的な交流のきっかけにもなっていたようである。

研修1日目はセルフ・レスキュー技術として、骨折・捻挫箇所の固定法と、傷病者搬送の2点を学んだ。午前中は、まずどのような状況であればセルフ・レスキューを行なえるのか、また、どのような手順と着目点によりレスキュー

を行なうべきかを、加藤ガイドに講義していただいた。その後、骨折箇所に応じた様々な固定法を、実際に役割を交替しながらやってみて、各チームのどのような点が優れているか、あるいは改善すべき点は何かを全員で意見交換しつつ練習した。

午後には傷病者を搬送するいくつかの手段を実践練習し、特に長距離の搬送に使うものとしてザックを連結して作る簡易担架の作り方を学び、搬送訓練を行なった。搬送訓練では実際に山の中を想定して、研修所の敷地内山林にある訓練コースを使用して30分の搬送を行なった。この訓練コースは起伏



簡易担架による搬送方法を指導される隊員たち

に富んでおり、大小の障害物もあり、お互いに声を掛け合わなければ転倒や滑落の恐れもあり、また、長時間動くことで担架が緩んでしまったり、傷病者がずれてしまったり、あるいは体力的なハードルの高さを感じたりと、平地では想定できなかった長時間搬送の難しさや、チームワークの重要性を体感することができた。

意外なことに、日本隊の一部の学生を除くほぼ全員の学生がこの手の技術講習を受けるのは初めてという様子で、非常に熱心に取り組んでいた。そして、こうしたレスキュー訓練は一度やったきりでは意味がなく、いつでも使える技術にすべく、定期的に訓練を行なうことが必要だと感じた。

研修2日目の午前中は、クライミングの基礎技術の確認を行なった。文化の違う学生同士が安全にクライミングを行なうには、共通の手順を踏み、例えば英語を共通言語として適切に意思疎通を図る必要があるということで、ロープワーク、支点構築、リード・クライミングのコールの確認などを行なった。ほとんどの学生は、クライミングについては技術水準もお

およそ等しく、この点では前日に比べて皆、リラックスした雰囲気の中で講習が進められた。

クライミング技術確認の後、立山カルデラ砂防博物館へ見学に行き、立山の自然環境や砂防についても学ぶことができた。

午後には、8つの3ヶ国混成チーム対抗でクライミング・コンペが開催された。トップロープ方式で、アドバンス／ビギナー／スピードの3クラスに分けて順番に登り、チーム全員の合計点により競った。各チームともレベル別に挑むことができ、非常に盛り上がるものとなった。

8月16日

バスで室堂へ上がる道中では、称名滝や弥陀ヶ原を見学した。室堂到着後は、順応のために1時間にわたり室堂ターミナル周辺を散策。前日まで天候不良が懸念されていたものの、なんとか天気が持ち、立山三山縦走から雄山往復へと計画を短くして決行となった。

室堂からは4グループに分かれて一ノ越経由で雄山を目指した。学生同士大分打ち解け合って、笑い声の絶えないぎやかな登山となった。一方で、一ノ越から雄山



クライミング・ボードで基礎技術を確認する

までの急登では気を抜かず、真剣な表情で登山に集中する姿も見られた。この日は好条件とは言えないなかでも、全員で雄山を登頂するという、本交流会における一つの大きな成果が得られた。また、雄山の山頂では雄山神社峰本社への参拝も行ない、日本の登山信仰にも触れてもらうことができた。残念ながら雄山に到着するころにはガスが懸かってしまったが、ときおり見えるアルプスの雄大な山々やライチョウの姿に、中・韓の学生たちも大きな感動を覚えたようであった。

この日は室堂平の雷鳥荘に泊まり、彼らにとっては初めてとなる、



立山・雄山山頂で記念写真に収まる交流登山隊一行

山上での温泉も体験。温泉体験は非常に好評だったようで、複数回入った学生もいた。

8月17日

立山・室堂より東京へ移動。天候が悪く大観峰からのロープウェイでは展望はなかったが、黒部ダム観光放水は見学できた。

この日は、前日までの禁酒令の反動からか、盛大に懇親会が行なわれた。そして、長い夜となった。

8月18日

ホテルからバスにてスカイツリーを見学。東京の街を一望できるだけでなく、日本のエレベーター技術の高さにも感心していた。その後4グループに分かれ、浅草や

秋葉原、銀座などへ東京観光。最終日のお別れ会は盛大に行なわれ、日本山岳会会長、副会長、および中・韓の代表からそれぞれスピーチをいただいた。

8月19日

各国隊は成田、羽田より帰国の途へ。

まとめ

今回は登山技術研修と立山登山を通して各国の学生が交流を図った。例年どおり各国の学生は、英語を基本としたあらゆる手段を駆使しての意思疎通に果敢に挑戦し、お互いの文化についても触れることができた。韓国からは、この交流会を終えて帰国後の9月には、ヒマラヤへ遠征登山に行くという学生が、中国からは世界クラスのコンペに出場するような女子クライマーが参加しており、こうしたワンランク上のレベルの登山への学生たちのモチベーションを高めることができた。

たまにでもいいから、これからも長くつながりを保っていきましょう。いつの日かの再会の約束を交わして、今年の日中韓3国学生交流登山は締めくくられた。

(名古屋工業大学・小澤佑介)

韓中日交流登山に参加して

韓国山嶽会 キムヒョンジン



韓国隊のキムヒョンジンさん

8月6日、韓国山岳会館で結団式を行ない、最後の訓練をした後8月12日、仁川国際空港から富山空港へ移動して、まず日本山岳会との出会いを持ちました。初めて見た日本の友人たちは、考えたのと同じように恥ずかしがり屋で、引っ込み思案だったのです。けれども話してみると、善良で良い友だちだと感じられて、もっと積極的に話しかけて、日本文化に対して聞いてみました。

翌日、中国山岳会の来日とともに私たちは富山の登山研修所に行きました。登山研修所は施設がものすごく良いので、びっくりしました。登山研修所での初日、開会式の後に各国のリーダー3人が壇上で挨拶をして、英語で抱負を明らかにしました。その後、私たち

は互いに準備したプレゼントを交換するなどしながら親睦を深めました。

3日目は、加藤先生からセルフ・レスキューを学ぶ時間がありました。各国の学生たちが積極的に参加して、皆多くのことを知ることができました。昼食をとった後には、患者を搬送する方法について教えてもらいましたが、リュックサックを連結して担架を作る方法でした。担架をスリングで連結して人を横たえて運ぶ方法でしたが、私が担架に横たわりました。私を持つてチーム員たちが歩いてくれたのですが、すまない気持ちでいっぱいになりました。そんな患者が生じたときの対処方法を学んだ後、今後どのようにしなければならぬのか教育を受けて、意義深い時間でした。

4日目は、ロープを巻く方法と装備着用法を学んだ後、立山カルデラ砂防博物館に行きました。立山と黒部ダムに関して知り、そこに住む動物たちも知る時間を持ちました。その後、登山研修所でチーム別にクライミング大会を開催しましたが、easy, hard, speed gameの3種目がありました。私はeasy

コースを選択して、簡単に完登しました。競争大会でしたが、韓中日3国の友人たちが一人ずつ登攀するとき、たくさん応援をしてあげて、互いに励まし合っている姿を見ながら、実に良い友だちだということを感じました。

大会を終えて夕食を食べた後、日本側で準備した贈り物が机に置かれていました。靴はブランド品のすごく良い物だったし、Tシャツなど多くの贈り物がありました。予想できない贈り物に皆驚いて、私は日本側の準備にものすごく感謝しました。

よく眠り込んだ翌日、日が明るくなって幸運にも天気が良く、楽しい気分です。バスに乗りました。2400m地点まで上がった後、1時間の自由時間を持ちました。立山は、事前に資料などで見たときより何倍も美しい山でした。

自由時間を終えたのち登山開始です。はじめは息が切れたのですが、歩いてみたら適応できました。登山しながら見る風景は、一生忘れられないものでした。そのようにして大変な道のりを越えて頂上に到着、分けてもらって食べた弁当は、実に蜂蜜の味でした。

その後、下山して雷鳥荘に到着、風呂に入りましたが、立山の風景を見ながら入る浴室が手当てされていて、実に疲労がすべて洗い流されていく気分でした。また、山荘で夕食に出された和風の食事は、実においしかったです。

6日目はバスに乗って移動して、黒部ダムの観光をしました。翌日は東京で、スカイツリーという世界で最も高い塔に行つて自由観光をしました。最後の晩餐会では皆先生に挨拶をし、歌を歌ったりしましたが、楽しい雰囲気の中でした。最後の日の朝、1週間で友情が篤くなった方たちが、私たちをバスの前まで見送ってくれ、互いに抱き合い、握手をして別れの挨拶をしました。

韓中日学生交流登山は、毎年、各国を訪問して一緒に登攀し、交流して、新しい未来の成長動力である若い大学生の登山家を育成しようというところで始まりました。私は今回の交流を通して、新しい友人たちと1回にとどまらないで、交流登山が終つてからも持続的に連絡して、今後、新しい未来のアルピニズムと山岳運動を導ける力量が共有できることを希望します。

中日韓登山交流活動総括

中国地質大学 趙光徳

大学と中国を代表して第10回中日韓学生登山交流活動に参加できたのは大変喜ばしい。

8月13日、我がチームは浦東空港から飛行機に乗り、日本の富山に向かった。2時間余り飛行したのち富山空港に到着した。日本と韓国の学生が空港で出迎えていたでいて、大変うれしかった。

日本に着いて第一に感じたのはすべてがきれいなことで、隅々まで非常にきれいで、かつ日本の通路には全くゴミがない。ゴミをゴミ箱に捨てるにも厳しい分類があり、紙・プラスチックボトル・空缶・電池・生活ゴミなど別々に捨てなければならぬ。(中国)国内の基本は回収可能/回収不可能だが、我が国家が、これからこのよ



中国隊の趙光徳さん

うな環境保護に対する意識を十分に勉強することを期待している。

我々が富山に到着したら、すぐに日本の方々の温かい応対を受け、全体の行程を非常に順序良く準備して、計画してあることを感受できた。

(1)簡単な開会式の後、3つの国がプレゼントを交換、これは参加者が互いに良く理解し合う過程の一つだ。相互理解を通して友情が増進し、継続する活動の中でさらに融和することができる。

(2)私たちは、比較的最先端のアウトドア救援技術を大いに勉強した。私たちは日本の講師から、救援具製作による負傷者の簡単な処理法を教わった。リュックサックで製作した担架と、直接リュックサックおよび安全ベルトを使って負傷者を背負う方法がある。そして、技術を専門的に習得できる練習および実習時間が与えられた。我々が実際の技術を利用する際に、注意すべき点を理解するところまで到達できるように教わった。

(3)立山に登って登山路で私が感じたのは、登山路に沿って歩くことしかできない、かつどこでも自由に歩けない、良好な登山環境を

保護するために、このとても良い方法を失わないように、私たちは参考にすべきだ。このような環境を保護することができて、さらに登山者に便利さを提供できる。あるいは、行方不明や道に迷う可能性を減らすことができる。

そして、登山中に見た多くの70、80歳くらいの老人も皆、山登りの運動に参加していた。また4、5歳くらいの子どもが両親の山登りに付き従って、体を鍛錬していたひるがえって言う、我が国では4、5歳の子どもでは、すべての両親が危険だと思い、間違いなく子どもを山登りに行かせない。

今回の交流活動への参加を通して勉強できたことは大変多く、自己の存在不足を十分意識できた。自分の英語水準では限界があり、日・韓両国の仲間との学習に少しもどかしさを感じたので、英語学習の努力を継続し、将来良い学習交流の基礎を築くことができるようにしたい。

さらに、もっと多くの中日韓3国の大学生に交流学習の場を提供するために、中日韓交流活動が継続していくことを希望する。

NEWS

スポーツ・クライミング
東京五輪追加種目に正式決定

8月3日(日本時間4日)、ブラジルのリオデジャネイロで開催された第129回IOC(国際オリンピック委員会)総会で、東京2020オリンピックの追加競技種目に提案されていたスポーツ・クライミング、野球・ソフトボール、空手、スケートボード、サーフィンの5競技18種目(選手総数474人)が一括承認された。

IOC総会で全会一致の承認を見守った国際スポーツ・クライミング連盟(IFSC)のマрко・スコラリス会長は、「スポーツ・クライミングが東京2020オリンピックに参加できることを大変うれしく思います。オリンピックは長きにわたる私たちの夢であり、これまでの努力が報われました。スポーツ・クライミングにすばらしい機会を与えて下さったIOCに感謝いたします」と語った。

また、スコラリス会長は、「私たちは、このすばらしい登攀の最後のホールドにたどり着きましたが、またさらなる壁が私たちを待ち受

けています。私たちのチームはスポーツ・クライミングをオリンピックに相応しいものに準備すべく、IOCとともにこの4年間、努力を続けてまいります」と締めくくった。

スポーツ・クライミングが五輪競技種目に選ばれるまでの経緯は、以下のとおりである。

2014年12月にモナコで開催されたIOC臨時総会で、IOCの中期改革案「オリンピック・アジェンダ2020」が満場一致で採択された。その中で、現在の夏季五輪28競技の上限が撤廃され、五輪開催都市が複数競技種目を提案することが認められた。

東京五輪組織委員会では、これを受けて2015年5月、33の非五輪競技団体に応募用紙を発送し、同年6月、応募のあった26競技団体から8競技に候補が絞られた。スポーツ・クライミングはこの8競技に残り、8月にIFSCと日本山岳協会は、東京五輪組織委員会にプレゼンテーションを行なっ

た。

組織委員会の追加種目検討会議(御手洗富士夫座長)では、最終候補に残った8競技について、3つの主要原則、①若者へのアピール②国民機運の向上③公正で開かれた選考プロセスなどを重視し、さらに計画やコスト面で考查した。そして、9月28日に東京五輪組織委員会は、前記5競技18種目を1パッケージとしてIOCに提案することを発表した。スポーツ・クライミングは、「アウトドア・ブルームの代表格。これまでの五輪競技にはなかった垂直方向に登るアスリートの力を競うという特徴が、ユニークな新しい価値をもたらす」ことが評価されたと思われる。

東京五輪組織委員会から推薦を受けたIOCでは、2016年6月の理事会で、8月の総会に5競技1パッケージで提案することを承認し、今回の総会決議となった。

今回正式決定



スポーツ・クライミング大会におけるリード競技

されたスポーツ・クライミング競技は、メダルの数(種目)は男子・女子各1の計2種目。選手数は男子・女子各20人の計40人。競技の内容は、リード、ボルダリング、スピードの3種目複合。順位は3つの合計ポイントで確定すると思われる。詳しいオリンピック・フォーメットなどは、まだIFSCから提示されていない。

IOC総会では、追加競技の開催会場についても提案され、スポーツ・クライミングの会場候補地は、お台場の江東区青海地区とされた。最終決定は、12月のIOC理事会で承認となる。

(日本山岳協会副会長・尾形好雄)

東西南北

N

S

秘峰登山のススメ(下)

西川元禧

北アルプスでは毛勝三山の猫又山(2378m)。8月初旬まで頂上直下に残雪があつて幕営に便利で、訪れる人が少ないせいかライチョウが多く、足元に群がつてく

るほど。登山口の馬場島から1日で登ることができる。頂上からは目の前に迫力ある北面の剣岳が望める。ここをベースに両隣りの秘峰・釜谷山(2415m)や赤谷山(2258m)に、それぞれ日帰りで足を延ばせる。

北アルプスで、もうひとつは唐沢岳(2633m)。餓鬼岳小屋から北西に往復約6時間で行ける頂上には花崗岩の間にコマクサが咲き、後立山の烏帽子岳や野口五郎岳、鷲羽岳等を望むことができる。中央アルプスでは三ノ沢岳(2

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

847m)が主稜線から離れていて極楽平から2時間で山頂。360度の展望が得られる。越白山(安平路山縦走の中間にある奥念丈岳(2302m)も途中ヤブの深い踏み跡もあるが、貸切の頂上から東に伊那谷を隔てて南アルプスの大展望が得られる。

南アルプスではまず早川尾根の高嶺(2778m)をお薦めしたい。隣の鳳凰三山・地藏岳(2764m)よりも高いのに人が来ない。東側間近に鳳凰三山、北西には甲斐駒、西に仙丈ヶ岳、南西に野呂川を隔てて北岳、間ノ岳、農鳥岳の眺めがすばらしい。

南アルプスでは広河内岳(2895m)もお薦め。農鳥岳から南下して大門沢下降点から稜線を1時間弱登れば頂上に到着し、大井川東俣を隔てて塩見岳のさつそうとそびえている姿がすばらしい。その塩見岳から南東へ稜線伝い

に約2時間で行ける蝙蝠岳(2864m)も秘峰としてぜひお薦めしたい。南アルプスでは大沢岳(2819m)もお薦め。赤石岳から聖岳へ縦走するときに大沢岳を通らないで中盛丸山(2800m)・小兎岳(2738m)・兎岳(2799m)と進む人が多いが、頂上からは塩見岳、荒川三山、赤石岳、聖岳と、南アルプス中核の山々の迫力ある展望ができるのでぜひ立ち寄って欲しい。

北陸では福井県の平家岳(1442m)をお薦めしたい。九頭竜湖を箱ヶ瀬橋で南岸に渡り、面谷鉦山跡を経て登山口へ。稜線に上り南に向かつて進むと、井岸山から西に向きを変えて頂上に着く。能郷白山、荒島岳、部子岳、銀杏峰、白山、乗鞍岳、御嶽山など360度の展望が得られる。

近畿では大峰山脈南部の笠捨山(1352m)をお薦めしたい。紀伊山地の脊梁・大峰山脈は修験者の奥駈道として世界遺産に指定され、吉野から熊野に至る稜線は100kmにも及ぶため3回に分け、延べ2週間かけて縦走したが、特に南部は法螺貝を吹く白装束の修験者に出会うこともあり、山深く

静かな笠捨山頂上からは雄大な展望が楽しめる。大峰の最高峰・八経ヶ岳に日帰りで登って「大峰に登った」とする人が多いが、ぜひ南部も訪れて欲しい。

四国では石鎚山の西方にある二ノ森(1929m)をお薦めしたい。近畿以西では石鎚山(1982m)、剣山(1955m)に次いで第3の高峰。一等三角点の山頂からの展望がすばらしい。混雑する石鎚山から2時間で行けるのに訪れる人もいない。二ノ森・石鎚山・瓶ヶ森(1896m)・笹ヶ峰(1859m)・東赤石山(1707m)を1週間かけて縦走したとき、主稜線から寄り道した岩黒山(1745m)、筒上山(1859m)、手箱山(1806m)や冠山(1732m)、平家平(1693m)なども人に会わない秘峰と言えよう。

九州では阿蘇山の一等三角点峰・烏帽子岳(1337m)をお薦めしたい。阿蘇はカルデラの直径が25kmと世界最大級の火山で、カルデラの中を鉄道が走って複数の駅があり、阿蘇神社もある。紀元前創建で肥後の国一之宮だが、今回の地震で立派な社殿が崩壊したのは残念至極。中央火口丘には高

岳(1592m)、中岳(1502m)、根子岳(1408m)、烏帽子岳、杵島岳(1270m)の阿蘇五岳と往生岳(1235m)がある。

一般的には日帰りで中岳と高岳に登って「阿蘇山に登った」とするが、私は例によって五岳や往生岳、南外輪山の縦走、北外輪山の遠見ヶ鼻(936m)、一等三角点・尾ノ岳(1041m)など、5日間かけて阿蘇を楽しんだ。その中で烏帽子岳は山容が円錐形で美しく、眺めも良い。

九州では屋久島の永田岳(1886m)もお薦めしたい。宮之浦岳(1935m)との分岐・焼野三叉路から1時間で行けて九州第2の高峰なのに登る人は少ない。頂上には花崗岩の巨岩がたくさんあって、展望も近くの宮之浦岳、栗生岳(1867m)、翁岳(1860m)、安房岳(1847m)、黒味岳(1831m)などはもちろん、遠く種子島や口永良部島まで見える。永田岳を越えた所に鹿之沢避難小屋があり、水場もある。ここに泊まって翌日、踏み跡程度の部分もあるが約8時間で島の北西方、アカウミガメの産卵で有名な永田浜へ下ることができる。

ロンドンのウェストン宅を訪問した話

木下喜代男

私はウェストン師の山行以外の飛驒との関わりについても調べているが、師の山旅日記から、明治期の飛驒の様子が新たに分かったりしてなかなか面白い。

よく知られているように、ウェストンはこの国の農山村の純朴な人々を温かい厚味のある観察眼で眺め、古くからの民俗、習慣に共感を抱き、日本に限りない愛着を示して英国に紹介してくれた人であった。

ウェストンが乗鞍登山の途中、宿泊した高山の宿屋でのもてなしぶりにいたく感動したことや、高山の街から望む飛驒山脈を「日出ずる国の領内ではここからが一番」と絶賛していることなどを飛驒地域で紹介するにつれ、一般の方も師のことをよく知るようになった。

さて、昭和12(1937)年4月19日、朝日新聞記者・荒垣秀雄氏(後に同紙で「天声人語」を執筆)がロンドンのウェストン宅を訪れて

いる。

荒垣氏は飛驒出身で、私の高校の大先輩。そのときの手記が、翌年飛驒の郷土史研究誌『ひだびと』第六年第八号(第五〇号記念)に掲載されているので紹介したい。

以下、手記を要約。

荒垣氏の訪問の目的は、秩父宮との思い出を聞くことと、日本山岳会から非公式に依頼された顕彰レリーフの設置希望場所を尋ねることであった。

この年荒垣氏は、ジョージ6世の戴冠式に参列される秩父宮の随行者として渡英。日本を出るときウェストンは重病だと聞いていたが、住まいへ電話を入れると本人が出て、翌日のアポイントが取れた。タクシーでケンジントン・ガーデンに近いイヴァナコートにあるフラット(アパート)へ行く。

部屋は5階の57号室であった。部屋へ入って驚いたのは、そこがまるで日本人の住まいのように日本調で埋まっていることであつた。古色蒼然とした桐の箆笥、金具の付いた用箆笥などがあり、壁には広重の東海道と富士の版画が掛かっていた。日本での思い出の品とともに老後を養っていたウェ

ストンは、このとき76歳で元気だったが、夫人が入院中であつた(夫人はこの一ヶ月後に逝去)。

師は来訪を非常に喜び、夫人の写真や夫婦で嘉門次と写っている写真などをいろいろ見せてくれ、懐かしそうに説明をしてくれた。嘉門次の消息を聞かれたので逝去したことを話すと、黙って小さくうなずいた。

荒垣氏は「自分は登山家ではないが、故郷の友人は飛驒山岳会の仕事をしている」というと、師は出身地を具体的に尋ねた。高山の近くだというと、さらに具体的に尋ねるので船津だというと、なんと船津をよく覚えていて、本棚から取り出した自著『日本アルプス登山と探検』の地図で指してくれた。この後、師の功績を称える記念碑の設置場所の希望を聞く。

荒垣氏は、「日本山岳史における貴下の功績については山に関心のある日本人で知らぬものは一人もない。しかし、どうしたわけかこの功に報いようというのをだれも忘れていた。ウェストン翁病むとの報が新聞に伝わるや、皆が急にこのことに気づき、いったい今まで翁を遇するの道を知らな

かったのは、日本山岳会の恥だったことが今痛感されている」と話すと、師は感動のあまり目を閉じて唸り出してしまい、しばらくは一語も発しなかった。

山岳会では貴下の気に入る所に建てたいのだと言うと、言下に「それは決まっている。槍と穂高へ登る上高地だ。私はこの2つの山を最もよく登攀し、最も愛し、そして上高地から仰いだ」との答えが返ってきた。このとき師の老いの瞳に一瞬、穂高と槍の姿が映るかに思えた。

最後に秩父宮とのアルプス登山などの思い出を聞き、会見を終えた。

帰りエレベーターの所まで送ってきたウェストンは、鮮やかな日本語で荒垣氏に「さようなら、お大事に」と別れを告げた。

その後、同年6月には日本政府から師へ勲四等瑞褒章が贈られ、8月には上高地に佐藤久一朗氏作のレリーフが設置されたことはよく知られていることだ。

この会見の3年後、昭和15(1940)年に師は天国へ召された。享年79。

活動報告

山行委員会

スペイン最高峰ティデ山 登頂ツアー

花のベストシーズンのカナリヤ諸島、テネリフェ島・ティデ山(3718m)を目指してやって来た。

スペイン本土より南西へ1100km、マドリッドから空路3時間ほど。私たちが訪れたテネリフェ島、ゴメラ島、ラ・パルマ島のほか3島の7島からなっている。

テネリフェ島に着いた翌日、専用車でティデ国立公園に向かう。

途中、ビジターセンターに立ち寄りエキウム(ムラサキ科の固有種)を見ることができた。淡紅色の花穂の長さが人の背丈以上に伸び、寶石の塔と言われるのもうなずける。13時近く、登山口(2350m)をスタートする。荒涼とした赤茶けた砂漠のような道の所々に黄色(アブラナ科の花)や白いマーガレ

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

ットが咲いている。花々の可憐さと自然に対峙する逞しさを感じる。緩やかに登ること2時間30分、ここから急登が始まる。高度差600m、稜線はるかにポールが見えるあたりにアルタビスタ小屋(3250m)。ジグザグの道をゆつくりと、ただひたすら高度を上げていく。眼下には歩いてきた砂の平原が広がっている。18時に小屋に到着。電気ポット、レンジ、食器などがそろっていてなかなか快適だった。

5時30分出発。月が輝き星がきらめき、雲海が外界を包み、小屋の灯がぐんぐんと下になっていく。日が昇るころ前方に山頂が見えてきた。ゴンドラ駅(3500m)周辺にはすでに多くの登山者がくつろいでいた。ここから硫黄の臭いや水蒸気を吐き出している山肌を横目で見ながら、急登を1時間ほどで山頂に立つことができた。隣



ティデ山のエキウム

のゴメラ島がうつすらと青空に溶け込んでいた。下山はゴンドラ駅に戻り、ロープウェイに乗り込み、あっけなく2日間の登山が終わってしまった。

別動隊の4名は登山隊が出発後、43もあるトレイルの中で、今や盛りの百花爛漫の数え切れない花々を各所で眺めながら歩いた。昼食後、ロープウェイ利用で山頂駅へ。入山許可証(許可証は1ヶ月前に申請の必要有)を提示後、山頂に向かう。無風快晴でコバルト色の空と雲海スカートをはいたティデ山頂を楽しんだ。

その後、全員でゴメラ島の世界遺産ガラボナイ国立公園、ラ・パルマ島のカルデラ・デ・タブリエンテ国立公園・世界各国の天文観測所が集まっているロケ・デ・ロス・ムチャチョスをトレッキングして、それぞれの異なる島の自然を体感し、9日間の旅を終えた。

(染谷美佐子)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

秋田支部

第32回東北・北海道地区 集会開催

第32回東北・北海道地区集会は
7月30日(土)31日(日)、秋田支部担当
で実施した。30日(土)は、秋田県北
秋田市森吉地区の森吉山荘を会場
に、東北・北海道のほかに、越後、
茨城、千葉、首都圏、静岡、関西、
そして地元山岳会も含めて85名の
方々が参集した。

7支部の支部長会議では、各支



森吉山で行われた地区集会

部の近況と次年度の開催支部につ
いて話し合った。

集会は15時に始まり、今野支部
長から、この集会の第1回が秋田
支部担当で、昭和57年に秋田駒ヶ
岳・鶴ノ湯温泉で行なわれ、秋田
は今回6回目の担当となったが、
今年は山の日施行の記念すべき最
初の年であり、このように盛大に
開催できることをうれしく思う。

また、県生活環境部自然保護課
や津谷永光北秋田市長はじめ、地
元行政や森吉、阿仁、鷹巣山岳会
などの協力に感謝している。集会
では85名の方々が支部の枠を超え
て、形式にこだわることなく、素
朴な中にも心からの交流を深め、
森吉山域の緑したたる雄大な自然
と民俗文化や歴史に接し、楽しん
でいただけたと思う、との挨拶が
あった

津谷永光北秋田市長の歓迎の言
葉があり、続いて「森の恵み・山

の生活」と題して、秋田県文化財
保護協会理事で北秋田市文化財保
護団体連絡協議会長の戸嶋喬氏の
記念講演。森吉山の魅力、菅江真
澄も森吉登山をしたこと、阿仁マ
タギについても興味深く話された。
その後、玄関前の広場に移動し、
県指定民俗文化財の「阿仁前田獅
子踊り」を見せていただいた。太鼓
や横笛に合わせて、激しいテンポ
での踊りの後半、夕立に見舞われ
たのも忘れられない。見物者はボ
ーチに駆け込んだが、獅子踊りは
続けられた。

懇親会は18時から行なわれ、参
加した地元・森吉山岳会会員が
「森吉賛歌」を歌い、会場は盛り上
がった。各県自慢の銘酒が並ぶな
か、話題のクマ鍋が振る舞われ、比
内地鶏や地元山菜料理をいただき
ながら各支部等の紹介にもぎやか
に行なわれた。

次年度開催地・岩手支部の阿部
裕二副支部長の挨拶で閉会となり、
席を変えて二次会となった。

31日(日)の交流山行は、森吉山登
山と桃洞の滝散策の2つのグルー
プに分かれて行動、青空の下、さ
わやかな風を受けて、快適な登山
日和となった。

〈森吉山登山〉

森吉山(1454m)は、秋田県
のほぼ中央に位置し、県境に属さ
ない山で一番高く、ブナやモロピ
(アオモリトドマツ)の原生林、花
の百名山、クマゲラの生息地とし
て知られ、蔵王や八甲田に次いで
樹水でも近年脚光を浴びてきてい
る。この山域もここ50、60年の間
に大きく変わってきたが、昭和59
年には全国高校総体登山大会、平
成10年には皇太子殿下もお見えに
なられたボーイスカウト全日本ジ
ャンボリー大会、平成19年には秋
田わか杉国体山岳競技が行なわれ
ている。

ゴンドラ山麓駅発8時45分。山
頂駅広場で軽い運動をして9時30
分ごろ出発。石森と阿仁避難小屋、
稚児平で休憩、山頂には予定どお
り11時ごろ到着。ハクサンシヤジ
ンやハクサンボウフウ、エゾシオ
ガマなどの花が咲いていた。モロ
ピの樹の近くでは、独特のさわや
かな香りが漂っていた。

山頂で佐々木民秀顧問から森吉
山からの展望の説明があったが、
ときどき薄いガスも懸かって、鳥
海山や岩木山は見え、秋田駒ヶ
岳や八幡平は見えた。

今野支部長が地元・鷹巣山岳会の方の協力を得て抹茶を点てて、佐々木顧問が高齢者や女性に振る舞って、喜ばれた。

〈桃洞の滝散策〉

佐藤澄夫県立自然公園管理人が同行し、奥森吉のブナ原生林と桃洞の滝、清冽な流れを楽しみながら行動した。

ブナ、モロビの緑輝く原生林、高山の花々、心地よい風や名瀑は、様々なメッセージを今回の参加者に送って、思い出に残る集会になったと思う。

(今野昌雄)

東九州支部

「山の日」記念in大分・くじゅう登山大会

日本山岳会東九州支部と大分県山岳連盟、大分県勤労者山岳連盟、全九州アルパインガイドクラブの大分県内主要山岳4団体は、「山の日」の施行を記念する行事を企画するため、5月25日に〈大分県「山の日」記念登山大会実行委員会(実行委員長は加藤英彦東九州支部長)〉を立ち上げ、協議と準備を重ねた後、さる8月11日(木)、〈山の日〉記念in大分・くじゅう登山

大会を開催した。

この行事は国民の祝日「山の日」が本年から施行されるにあたって、これを記念するため、「山に親しむ機会を得て山の恩恵に感謝する」という法の趣旨の浸透を図ることを目的として、山を愛し、自然を愛し、登山文化のいっそうの振興を図ることを目指し、広く一般の登山愛好者などに参加を呼びかけて開いた。大会当日は牧ノ戸峠と長者原の両登山口に参加者受付場所を設置し、受付で参加記念品引換券を配布して、各自自由に登山。定刻の11時から会場の「久住分かれ避難小屋前」でセレモニーを開会した。

大会は県岳連会長の開会挨拶の後、実行委員長挨拶。続いて来賓として招待した阿蘇くじゅう国立公園自然保護官が祝辞、大分県知事、竹田市市長、九重町長、大分森林管理署長などからのお祝いのメッセージが披露された。その後、大会理念の発表を行ない、参加者全員で「坊がつる讃歌」の大合唱を行ない、約30分間の大会セレモニーを終了した。その後、参加記念品(スタイリッシュ・ドリンクボトル〈大会記念の銘入り〉や「山の日」

記念バッジなど)の配布を行なうて解散。後は参加者が思い思いのコースで夏の九重山を楽しんだ。当日は快晴で、平地では酷暑の中であつたが、標高1640mの大い会会場は風も涼しく、絶好の登山日和に恵まれた。なお、当日の九重連山では事故などの報告はなく、すべての行事は無事終了した。

(飯田勝之)

「山の日フェスタ」3支部の報告

群馬支部

ぐんま山フェスタ2016

群馬県内の山に関する幅広い情報を提供する「ぐんま山フェスタ2016」が8月6、7日の両日、群馬県前橋市の県庁1階県民ホールを中心に関われた。山フェスタは今年で3年目。実行委員会が主催し、地元紙の上毛新聞社とともに、日本山岳会群馬支部、群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟の県内山岳3団体が初めて共催に加わった。3団体は実行委員会にも参加し、イベント全体の企画、運営にも関わった。

群馬支部では、6日にマナスル初登頂60年を記念し、映画「マナス

ルに立つ」の上映と田中壯佑支部長による講演を行なった。130人ほどが入るホールはほぼ満席の盛況で、60年前の貴重な映像に見入り、興味深い話に聞き入った。

支部では、群馬県太田市出身で第3代日本山岳会長の木暮理太郎の資料展示と山岳写真展も行なった。理太郎の資料展示は地元太田市で顕彰活動を続ける「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の全面的協力を得て実現した。写真展では日本山岳写真協会長の橋本勝会員による迫力ある谷川岳の大判の写真と、群馬百名山から選りすぐった加藤仁会員の作品を飾った。相談ブースも設け、山の日の一フレッツなどの資料配布や来場者の相談に答えるなど、日本山岳会のPRにも努めた。

また、県内山岳3団体が県とともに作成を進めてきた「群馬の山のグレーディング」の大判のパネルを展示するとともに、印刷物の配布を行なった。

県山岳連盟では八木原園明日山協会長による講演「群馬のヒマラヤ登山」を開いた。また、会場内にクライミング・ボードを設置。スタッフの指導の下、子どもから高

年齢者まで、オリンピック種目に決まったスポーツ・クライミングに挑戦していた。

フェスタではこのほか、県庁としては全国一の高層庁舎の非常階段を、32階まで駆け上るバーティカル・ランニング、地元FM局の公開生放送、県内市町村などによる登山情報の提供、テントやアウトドアグッズの展示など盛りだくさんな内容となり、2日間で昨年の倍以上となる5500人が来場した。

(根井康雄)

東海支部

第4回夏山フェスタ開催を

振り返って

今年も6月11日(土)と12日(日)の2日間にわたり名古屋駅前前のウインクあいちの7階と8階にて夏山フェスタが盛大に開催された。7階はセミナーと山小屋中心の展示会場とし、8階は主展示会場の配置でメーカー関係25社、旅行・観光自治体関係24団体など、63の展示ブースに加え、56の山小屋が参加した。

今年は前夜祭を取りやめたが、来場者数は初日3280名、2日目4130名、2日間の合計74

10名を数え、昨年度より大幅に増えた。

今回も青年部・学生部・東海ユースの諸君がフェスタ運営業務の支援でがんばっていた。さらに東海支部が運営を引き受けた「山のよろず相談コーナー」では、各種相談に対応すると同時に、東海支部登山教室委員会が運営している登山教室の紹介、新規会員の募集活動(支部友会、青年部)にも努めた。とくに支部友会入会に興味を示された方が昨年の2倍強もあつたので、このことが会員増加につながればよいと思っている。同時に、書籍販売コーナーでは東海支部が携わった書籍に加え、本部の野口いづみ理事も参加して、ご自身の著作も販売した。

今年から始まる国民の祝日「山の日」関連の企画も盛りだくさんだった。まず国民の祝日「山の日」をより多くの人に認知していただくべく、啓蒙のチラシを来場者全員に配布すると同時に、「山の日」全国大会PR、〇ひとこと言わせて! 私が思う山の魅力と恵み」と題した放談会が開催された。当放談会には尾上昇日本山岳会元会長をはじめとして中部電力社長・

勝野哲氏、日本プロガイド協会会長・角谷道弘氏、山岳ライター・小林千穂氏、中部大学・福井弘道教授が参加した。

ほとんどのセミナー、トークショーは満席の盛況、特にアドベンチャー・レーサー田中陽希氏のトークショーには、整理券を求めて多数の方が朝6時半から並び始めるといふ異常事態となった。そのほか、角谷道弘氏の「山登りは、わが職業」と題したトークショーと小林千穂氏のトークショー「あの山この山、楽しい出会い!」は400人超の観客で溢れていた。三重県遭難対策委員長・居村氏の「鈴鹿の安全な歩き方」、氣象予報士・猪熊隆之氏の「山の天気の基本知識」、日本山岳会・登山医学会理事の野口いづみ氏の「山での病気とケガ、その対応」と題したセミナー、登山用品セミナー、鎌田則雄氏の「山と高山植物を撮る」セミナー、また、今年も行なわれた東海支部山行委員長・鈴木慎吾氏の「スマホを山で活用しよう」と題したセミナーにも大勢の方が熱心に耳を傾けていた。

(毛利邦男)

福岡支部

福岡で「山の日フェスタ」開催

山の日制定記念のプレ・イベントとして「第1回夏山フェスタin福岡2016」が6月25日(土)・26日(日)、福岡タワーにて開催された。主催は全国山の日協議会、季刊のぼろ(西日本新聞社)、YAMAP(株式会社セフリ)であるが、主管は福岡支部が行なった。会場1階多目的ホールに設けられた展示コーナーには、アウトドア関連メーカーや旅行会社、自治体関係など37のブースの出展があり、入場者数は土曜日が約1000名、日曜日は約2700名、合計3700名とにぎわい、出展者の方々もその反応に満足そうであった。

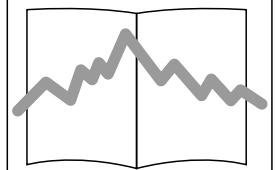
2階タワーホール会場では随時切れ間なく各種セミナーが行なわれた。日本山岳会会員では、井上晋氏(農学博士・森林生態学)による「日本の山を形成している樹木たち」、古野淳氏と春山慶彦氏(YAMAP)による対談「組織登山者と未組織登山者の現状と課題」、渡部秀樹氏「地図読みの基本・山で地図を使ってみよう」、田部井淳子氏による講演「山の日に向けて、日

本の山の素晴らしさ」などで講師を担当した。セミナー会場は260席の座席と広めの立見スペースを用意したが、どの講座も満席となり、特に田部井氏の講演では立見でも入り切れないほどの約500名の聴衆が聞き入った。セミナーの2日間の延べ参加者は4100名であった。参加者からは有意義なセミナーばかりで満足した、との声をたくさんいただいた。

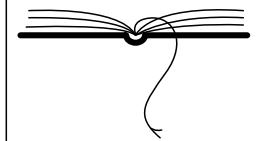
イベントの告知媒体は、雑誌、新聞、フリーペーパーなど7誌、ラジオ5局、テレビ1局、ウェブ関係は15サイトにリンクを張っていた。露出も高まったこともあり、老若男女、ビギナーからベテランまで幅広い層に集まっていた。

会場となった福岡市シーサイドももち地域は、当日にライオンズクラブ世界大会や中国の巨大クルーズ船入港、ブルーインパルスの航空ショーなどが重なり、たいへんなにぎわいであった。

(渡部秀樹)



図書紹介



富山県警察山岳警備隊編 富山県警レスキュー最前線



2016年8月
山と溪谷社
四六判 304頁
1600円+税

表紙ジャケットには剣岳をバックに雪渓を登る山岳警備隊員の雄姿。はるか下方には剣沢派出所の屋根が見える。私事になるが、40年ほど前にこの派出所で夏のヶ月を過ごした。

当時、派出所には野営管理所のスタッフが5名と山岳警備隊員が3〜4名、また、金沢大学医学部OBのドクターと、食事を作る女性スタッフが3名(その一人が私)いた。

地元の立山町で生まれながら、小学生のときの立山登山しか山の

経験がなかった私は、初めて会った「山のおまわりさん」の強さに心底驚いた。

事故の連絡が入ると、スノーボードを引いて、あつという間に剣沢雪渓を下っていく。そして時を置かずして「出合に着いた」とか「八ツ峰〇峰」という無線が入るのだった。また、ドクターと一緒に駆け下っていくこともあり「お医者さんもすごい！」と驚くことばかりだった。

暗くなつて心配していると、幾筋ものヘッドランプの明かりの中に、遭難者が乗るボートを引いて剣沢の雪渓を登ってくる隊員たちの力強い姿が浮かび上がり、本当に頼もしく思ったものだ。「富山県警の山岳警備隊は日本一」「落ちるなら富山側へ」と言われていた時代だった。

素人の私には、稜線上の事故で

も剣沢を駆け下っていくことが不思議でならなかったが、平蔵谷や長次郎谷の雪渓を使う方が速かったのだと今なら分かる。まだ県警はへりさえ持たず、そのへりが現場で直接遭難者をピックアップできるようなものもまだまだ先のことだった。警備隊員による搬出が、遭難者を助ける唯一の方法だった時代だ。

さて本書だ。その富山県警察山岳警備隊の現在のレスキューの現場を隊員が語っている。

大日岳での雪庇崩落事故や、記憶に新しい立山・真砂岳の雪崩大

量遭難がまさしく山岳警備隊の現場だ。水晶小屋のへり墜落現場も担当エリアだったし、五竜岳や雲ノ平へも出動する。

隊員の7割が富山県外の出身者で占められ、剣岳に登ったことがなかったという隊員もいる。そんな若い隊員が、厳しい訓練や実際の遭難に対応しながら、任務の重さを実感し、仕事に誇りを持っていく様が語られる。

どんなにへりでの救助がスピーディーになっても、レスキューの基本が昔気質の泥臭い「背負い搬送」であることを胸に刻み、「苦しくて、苦しくない！」を合言葉に日々任務に向かう彼らの姿に、4年前に私が目にした先輩隊員たちの精神が、確実に受け継がれていることが感じられる。

剣沢では、今でも派出所の前でラジオ体操をするという。朝の6時半には山のおまわりさんもドクターも、朝食の準備中の私たちも全員でラジオ体操。見回すとテントサイトのあちこちで、登山者も一緒に体操をしていた。私のいちばん好きな光景だ。

(三好まき子)

図書受入報告(2016年8月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
日本地図センター(編)	日本の山岳標高1003山	176p/30cm	日本地図センター	2016	発行者寄贈
山口県立美術館・松本市美術館(編)	遥かなる山：発見された風景美	160p/29cm	山口朝日放送	2016	編者寄贈
馬聯芳	潘多伝(中国語版)	190p/25cm	上海社会科学院出版社	2005	須崎孝子氏寄贈
馬聯芳(著) 須崎孝子・他(訳)	潘多伝(邦訳版)	83p/21cm	須崎孝子(私家版)	2016	訳者寄贈
益田福三	山と溪谷へ：単独行20年の記録	286p/22cm	白山書房	2016	出版社寄贈
井上靖	穂高の月(ヤマケイ文庫)	286p/15cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
とよだ時	日本百霊山(ヤマケイ新書YS029)	286p/17cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
室賀實	歩きし山々	42p/21cm	室賀實(私家版)	2016	著者寄贈
島田茂	無名峰：日高山脈100溪谷40支稜踏破の軌跡	209p/26cm	島田茂(私家版)	2016	高澤光雄氏寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2016：全日本山岳写真展作品集	168p/22cm	全日本山岳写真協会	2016	発行者寄贈

■8月の理事会は夏休みのため休会でした

ルーム日誌
8月

22日	青年部
12日	YOUTH CLUB 会 員データ管理システムWG
10日	山岳地理クラブ つくも会
9日	休山会
8日	総務委員会 スキークラブ スケッチクラブ
6日	三水会
5日	H CLUB 資料映像委員会 YOUT
4日	資料映像委員会 YOUT
3日	山行委員会 YOUTH CLUB 緑爽会
2日	常務理事会 学生部 YOUTH CLUB
1日	再生委員会

会務報告

23日 スキークラブ
24日 自然保護委員会 麗山会
25日 公益法人運営委員会 01会
山遊会 緑爽会

26日 総務委員会

29日 YOUTH CLUB
31日 総務委員会 YOUTH CLUB 会員データ管理システムWG

8月来室者 279名

会員異動(8月)

物故

水谷弘治(7373) 16・8・6
山岸和子(13371) 16・8・16
下川幸一(14504) 16・8・24

退会

齋藤清成(12381)
松沢秀俊(14623) 東海
西村敏彦(15068) 広島
加藤 仁(15651) 群馬



◆『木の目草の芽』123号を発行

自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の目草の芽』123号を発行しました。今号は、7月16日に開催した「自然保護全国集会in高知」の報告号①です。野生生物をめぐるグループ・ディスカッションの報告などを掲載しています。

《購読申込み》

川口章子 047-463-8721

✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp まで。

また、ウェブサイトでご覧いただけます。

JACホームページ↓日本山岳会の活動案内↓自然保護委員会↓委員会ウェブサイト↓機関紙
http://www.jac.or.jp/info/iinkai/shizenhogo/newsletter.html

◆大蔵喜福氏講演会

「魔の山マッキンリー（デナリ）の

インフォメーション

咆哮」気象観測登山27年間の記録

東京多摩支部集会委員会

高所気象観測を主目的に、北米大陸最高峰のデナリ（マッキンリー 6194m）登山を27年続け、今年25回目の登頂を果たした大蔵喜福会員。1990年当初から継続しているデナリ峰の「高山・風の研究」、「環境保全」など、貴重な写真を使つての講演会です。

日時 10月28日（金）午後6時30分
（8時（開場午後6時））

会場 立川市女性総合センターア

イムホール

資料代 500円

申込み 東京多摩支部 坂本正智

① ✉ big-matti@ksh.biglobe.ne.jp

② ハガキ 〒206-0003 1多摩市豊ヶ丘2-1-8 1102

③ FAX 042-373-3238

締切り 10月20日（木）

*申込者に会場案内図をお送りいたします。

◆講演会のお知らせ

緑爽会

日本山岳会の生みの親ともいふべき武田久吉。植物学者として尾瀬をこよなく愛した武田と昭和30年代に尾瀬を一緒に歩いた穴田雪江会員に、懐かしい映像も交え、エピソードをお話いただきます。

演題 武田久吉と歩いた尾瀬

講師 穴田雪江会員

日時 10月7日（金）18時

場所 日本山岳会104号室

定員 先着30名

問合せ 富澤克禮

TEL・FAX 042-324-4050

✉ tomizawa-katsunori@nifty.com

◆山スキー初・中級講習会

アルパインスキークラブ

スキーを使って雪山に登り、パウダー・スノーを蹴散らしながら滑ってみませんか？

本講習会ではその第一歩としてスキー滑走を楽しむための山スキーの技術・冬山技術および服装・用具の講習を行います。

山スキーに初めてトライしてみたいと思っている方で、ゲレンデの中級斜面を上から下まで降りてこられる方々を対象としています。

図書委員会からのお願い

会報「山」および機関誌『山岳』の「図書紹介」欄で紹介する出版物の選定並びに記事執筆は、原則的として図書委員会メンバーが行なっておりますので、「図書紹介」欄へのご投稿はご容赦下さい。例外的なケースは、事前に図書委員会にご相談いただけると幸いです。

なお、同じく原則的として小説や私家版の出版物（読物、紀行、案内書など）は対象外となりますので、ご承知おきください。

日時 2016年12月17日(土) 13時～16時
場所 石井スポーツセンター
u b 神田 6階「アースプラザ」
参加費 無料
申込み・問合せ 12月15日までに担当小山宛にメールにてお願いいたします。
✉ skidehappy2014@gmail.com
*詳細については、参加申込みされた方々にご連絡いたします。
なお、今回の机上講習会後に実技講習を行います。仲間に遅れず、ついていけるレベルを目指します。

◆編集後記◆

●8月は秋田駒と岩手山に登ってきました。念願の孫六温泉と松川温泉付きです。特に松川温泉には因縁がありました。若かりしころ、冬に八幡平から裏岩手へスキー縦走中、大深岳の先でホワイトアウトになり、松川温泉の地熱発電所の音も判断材料にして、必死に読図したことがあったのです。

●今回、岩手山から長駆松川温泉に下山、因縁の地熱発電所を目にすることができました。宿は峽雲荘でしたが、遅く着いたのに歓待していただき、温泉も最高でした。帰宅後思い出したのですが、峽雲荘や藤七温泉・彩雲荘、七時雨山荘などのご主人は、皆さんJACの会員だとか。ご挨拶もせず、大変失礼しました。改めてお邪魔させていただきます。(節田重節)

日本山岳会会報 山 856号

2016年(平成28年)9月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社